

調査報告

上総に伝わる日蓮聖人に関する伝承の調査報告

(日蓮宗現代宗教研究所嘱託)

石川 修道

日蓮宗現代宗教研究所の研究調査が、平成十六年十月三十日(土)行われた。現宗研田澤元泰所長、伊藤立教主任、山口功倫・舛井恵秀所員、岩本泰寛・石川修道・山田妙眞(現地妙長寺住職)嘱託の参加で、次のコースで千葉県内を調査した。

夷隅町大野・藤平家——大野光福寺——茂原市阪本法華谷の六老僧日向上人廟所——長南町笠森観音(天台宗)
——君津市蔵玉の星福山円盛院(清澄三虚空蔵の一つ)——君津市加名盛の道善坊経塚(墓所)——久留里妙長寺

二十九日午後九時～十一時まで田澤所長より茂原を中心とする宗教事情、日向上人廟の環境などが報告された。次いで石川修道師が、伝承学の見地から、その歴史的意義を講義した。今回は、日蓮聖人の俗弟と言われる貫名藤平重友の末裔の方々が小湊より夷隅郡大野村に定住している事実を確認すること、その末裔の人々が、それぞれの時代にどのように活躍してきたのかを現地にて研究調査することである。また、日蓮聖人の師・道善坊は、どのような人物であったのか、古来より伝承されている道善坊経塚(墓所)の霊跡を日蓮宗の研究機関である現代宗教研究所が調査訪問することに意義がある。

(一) 宗祖のご舎弟・貫名藤平家の伝承考

日蓮聖人は、多くの手紙を弟子檀徒に送っている。しかし、両親兄弟への消息文が残っていないのは不思議である。訳がある故に消息文を出されなかったか？ それとも安房国の領家尼、光日房尼、清澄寺の浄顕房などを経て、宗祖は、自らの消息を伝えたのだろうか。さらには宗祖の両親と中山の富木・曾谷殿と情報交流のルートがあり、富木殿を通じて安房国の人々へ宗祖の情勢が伝えられたと見るべきだろう。

日蓮聖人の両親は、「東条小湊の浦の釣人ごんのかみ権頭」①の貫名重忠（正嘉二年二月十四日歿）、母は「清原氏出身、舍人親王の後裔・畠山一族の大野吉清の女梅千代（梅菊）」②（文永四年八月十五日歿）と伝えられている。

宗祖の兄弟は四人説、五人説がある。『小湊系図』・『本化別頭仏祖統紀』は、

「長男藤太重政、次男早世、三男葉王丸（日蓮）、四男藤平重友」

の四人説をとり、『元祖化導記』・『日蓮大士真実伝』は、

「藤太重政、次男早世、仲三郎重仲（垂直）、日蓮、藤平重友」

の五人説を記している。

しからば、出家した宗祖には妻子が存せぬのは当然だが、兄弟の子弟は現在まで継続されているべきであり、その調査報告が本論である。

江戸時代には、宗祖一族の末流が上総国に住していたのは、いわば宗門の常識であった。六牙院日潮師の『本化別頭仏祖統紀』には、

「重友ハ貫名仲三郎藤平ト呼ブナリ。平ノ後裔豪富ニシテ子孫ノ居多クハ（上）総ノ於多喜（大多喜）ニ住ス。一族皆藤平ヲ以テ家公トナス」

小川泰堂居士の『日蓮大士真実伝』には、

「(貫名家) 末子を藤平重友と号し、此ノ子孫藤平を姓として今猶上総国大野の郷に存在せり」とある。

現在の千葉県夷隅郡夷隅町大野である。その末流が大多喜、大原町、長南町、富津市、鴨川市、久留里、勝浦市、鋸南町等に分流していった。

日蓮聖人の葬送儀(弘安五年十月)のあと、日興上人筆による『御遺物配分事』③には、

「御きぬ一、安房国新大夫入道

御きぬ一、かうし後家尼

御小袖一、安房国浄顕房

御小袖一、同国義成房

御小袖、同国藤平」

と記されている。玉沢妙法華寺系の京都本満寺四十九世境達院日順師の『御書略註』④には、

「男金新大夫入道ハ向師ノ舎兄

清澄ノ浄顕房ハ吾祖ノ御舎兄

小湊ノ藤平ハ宗祖ノ御舎弟」

と説明している。藤平氏系図(藤平孝子氏所蔵)にも

「重政藤太ハ出家シテ浄円坊ト云フ。重直ハ出家シテ浄顕房ト云フ」

とある。

藤平氏系図によると、宗祖の弟・貫名重友藤平は、小湊より夷隅大野村に移り、館を構えたという。それが本宅で

あるのか別宅であるのかは不詳である。重友公の法名・宗助院日法。正和元年（一二三二）二月二十四日歿。宗祖より五歳年下という。

藤平氏初代重継

安房三郎と号し、宗祖が池上にて臨滅のとき、十七歳で父重友公と共に参集したと伝えられる。建武二年（一三三三）七月、北条高時の遺子時行が北条家再興のため鎌倉を占領した「中先代の乱」の北条時行に属し、小田原に住したという。この乱は、そののち半世紀にわたる南北朝内乱のきっかけとなった。南朝の後醍醐帝と新田、北条軍が組して、北朝、足利軍と対することにより、北条家は後醍醐天皇より与えられた朝敵の汚名を天皇自身によって拭われた。法名・蓮継居士、貞和五年十一月十八日歿（一三四九）。

二代重輝

亀松こと喜平太・喜右衛門と号し、足利尊氏に属す。法名・蓮輝居士、応永十年五月七日歿（一四〇三）。

重輝は池上本門寺三世日輪上人の弟子・瑞竜院日契（？―一三五六）を招き、元亨三年（一三二三）三月竹之沢に瑞竜庵を建立する。今の光福寺である。二世は中老僧日賢上人が入る。岩本実相寺日源師の法弟にして雑司ヶ谷法明寺の開山となり、清水市松村海長寺日位のあとを受け二世となった人である。重輝の時代は、後醍醐天皇吉野に崩じ、新田義貞・足利尊氏も歿し、南北朝統一（一二三九―一三九二）への時代である。

三代重道

安房守、大蔵之丞と号す。法名・蓮道居士、文安元年七月四日歿（一四四四）。

室町将軍足利義満が南北朝を統一し、足利一族以外の守護制圧にのりだした。将軍と関東管領との勢力争いが起り、管領足利満兼は将軍義満に謀反して上野に出陣した。その影に南朝の残党武士の策道があり、重道は新田相模守等の討伐に軍功を挙げたと思われる。安房守と任じられ、伊豆に二百貫の領地を拝領する。この時、重道の五人男子のうち、嫡子喜八郎重良と次子平右衛門重照は上野国で討死した。

結城合戦（一四四〇）で敗れた里美義実が安房国へ上陸した頃、すでに藤平一門は内房の吉浜（保田市）に進出し、富士門流妙本寺の寺門経営に多大の寄進をしていることは、『安房国 妙本寺文書』に記されている。

四代重行

左京亮と号す。明応十年七月五日歿（一五〇一）。法名・泰山居士。

正平年間（一三四六——）より関東管領足利基氏が執事の山内上杉憲顕を安房国の守護に任じて以来、安房国は山内上杉家の配下にあつた。安房に上陸した里見義実が豪族の神余、安西、丸、東条の各氏を制圧し、まもなく上総の夷隅も支配したようである（文安二年、一四四五以降）。重行の時代に、夷隅と吉浜の藤平一門は里見家々臣となる。

五大重安

喜右衛門と号す。法名・玄唱居士。天文七年三月十七日歿（一五三八）。

重安の時代は、里美家二代成義（一五〇四歿）、三代義通（二五一八歿）、四代実堯（二五三三歿）、五大義豊（一五三四歿）の時代である。真里谷武田氏に北条早雲が加勢し、北条氏綱の上総進出に里見実堯は対立した。そして里見家内乱が起り、義豊が叔父の実堯を討ち、稲村の変（一五三三）、翌年残った家臣は、北条氏綱の力を借りて義

豊を討った（犬掛の合戦）。この合戦で藤平一門は実堯の子息・里見義堯に助成し軍功を挙げ、重安の嫡子重範は「安房守」に任じられ、千本城主となった。

相模三浦半島では、北条早雲が三浦家新井城を攻め、時綱は安房国正木郷（館山市）に逃れ（永正十三年・一五一六）、里見家重臣となる。これが正木大膳亮時綱で、子息の三男時忠は「養珠院お万の方」の祖父になる。

六代重範

軍蔵、安房守と号す。上総千本城主。法名・蓮常居士。元龜二年五月六日歿（一五七一）。

戦国時代の中で守護職と関東管領職が対立し、仲裁役の幕府が一方につき、室町足利幕府滅亡の時代である。

永正三年（一五〇六）一向一揆鎮圧の戦いで討死した長尾能景の子息為景は、父の死に関して越後守護の上杉房能を恨み、反乱を起こし主君房能を自害させた。ところが、弟を殺されて怒った関東管領上杉顕定は、八千の大兵を率いて鉢形城（埼玉県）を出て越後に進出し、弟の守護房能に背いた者を探し片っぱしから殺していった。これに越後の武士、農民は土一揆を起こして顕定に反抗した。越中より佐渡に渡った長尾為景は戦備をととのえ進軍を開始した。この形勢をみて、同族でありながら上杉顕定方についた上田坂戸町（六日町）の長尾房長も為景に寝返り、顕定軍は各所で潰滅状態になり、六万騎山（五日町）のふもと長森原に追い込まれて決戦が展開され、上杉顕定は高梨政盛に首を取られ、多くの関東軍、房総軍が討死した。この古戦場跡に道路拡張される十数年前まで房総兵の墓といわれる藤塚があったという。この地で重範の弟、藤平重恒と重利が討死している（一五一〇）。

こののち古河公方の足利晴氏は、小弓御所の足利義明の勢力増大を恐れ、北条氏綱に義明討伐を頼み、天文七年十月七日（一五三八）第一次国府台合戦が行なわれ、足利義明は敗死し、里見義堯は安房へ退去した。藤平家も、里見軍として参戦した。

七代重国

千本城主、東平安芸守。喜平太、喜右衛門と号す。法名・祐原院日心居士。慶長十七年十月二十五日歿（一六一二）。

重国の時代は、北条氏康が房総へ渡り里見義堯の久留里城を攻め、里見家に天文の内乱があり、吉浜の妙本寺日我は諸所に避難し、妙本寺の書籍、道具は悉く焼失し、聖教櫃、皮籠笈など牛十駄余りという（一五五一―一五六）。

永祿七年（一五六四）正月四日第二次国府台合戦が始まり、正月七日の初戦で大勝した里見軍は夜酒をくみかわし休息中、渡川した北条軍に八日未明総攻撃を受け、敗れる。里見義弘は安房国へ逃れる。

里見義弘は、鎌倉太平寺の青岳尼（小弓公方足利義明の娘）を妻とするが早世させ、後室に足利晴氏の娘を迎えたが子供に恵まれず、弟の義頼を養子とした。そのうち千本城主・東平安芸守（藤平重国）の妹（或は娘）を側室に迎えて出来た子息が「梅王丸」である。義弘歿後（一五七八）、義頼は里見八代を継ぎ、梅王丸を捕えて琵琶ヶ首に幽閉して領地相続を一人占めした。これに反発した諸将は、「久留里、千本ノ両所ヲ根城トシ、東平安芸守、同右馬允父子ヲ始、一揆所々ニ蜂起」したと関八州古戦録に記されている。この天正七年（一五七九）の事件がのちに、藤平一族が里見を離れ北条方につく原因となった。

国府台合戦後の永祿七年末に、正木時忠も北条と結ぶ方が有利と考え（里見家は家臣に恩賞の授与を渋った）、叛乱を起こし、下総の海上、香取の諸城を攻略した。この間に時忠は子息の権五郎時長（のち頼忠）を人質として小田原北条氏に送った。頼忠は北条氏綱の次男、治部大輔氏隆の娘と結ばれ、上総勝浦城で天正五年（一五七七）四月四日に生まれたのが、「養珠院お万の方」である。

里見系図によると、里見義弘に弟の義頼が養子に入り、次に梅王丸が誕生する。梅王丸の次に正木頼忠も義弘の養子になっている。つまり、藤平氏も正木氏も共に里見の重臣であり、梅王丸を通じて縁籍となっている。宗祖の弟・

藤平家の法華信仰が、梅王丸・頼忠を通してお万の方へ流伝したと考えられる。

重国の弟、重房は久留里藤平家の祖となり、永祿三年頃（一五六〇）定住したと言われる。次弟の重盛（守）は、天正十八年（一五九〇）小田原北条氏滅亡の時討死と伝えられるが、重忠の子息、重胤等一五〇騎を率いて小田原より埼玉の北条氏支城の松山城（東松山市）の応援に駆けつけ、玉川村の小倉山に入り開城したと言われる。

八代重忠

左京と号し、千本城主。法名・祐光院日善居士。元和元年四月

九日歿（一六一五）。

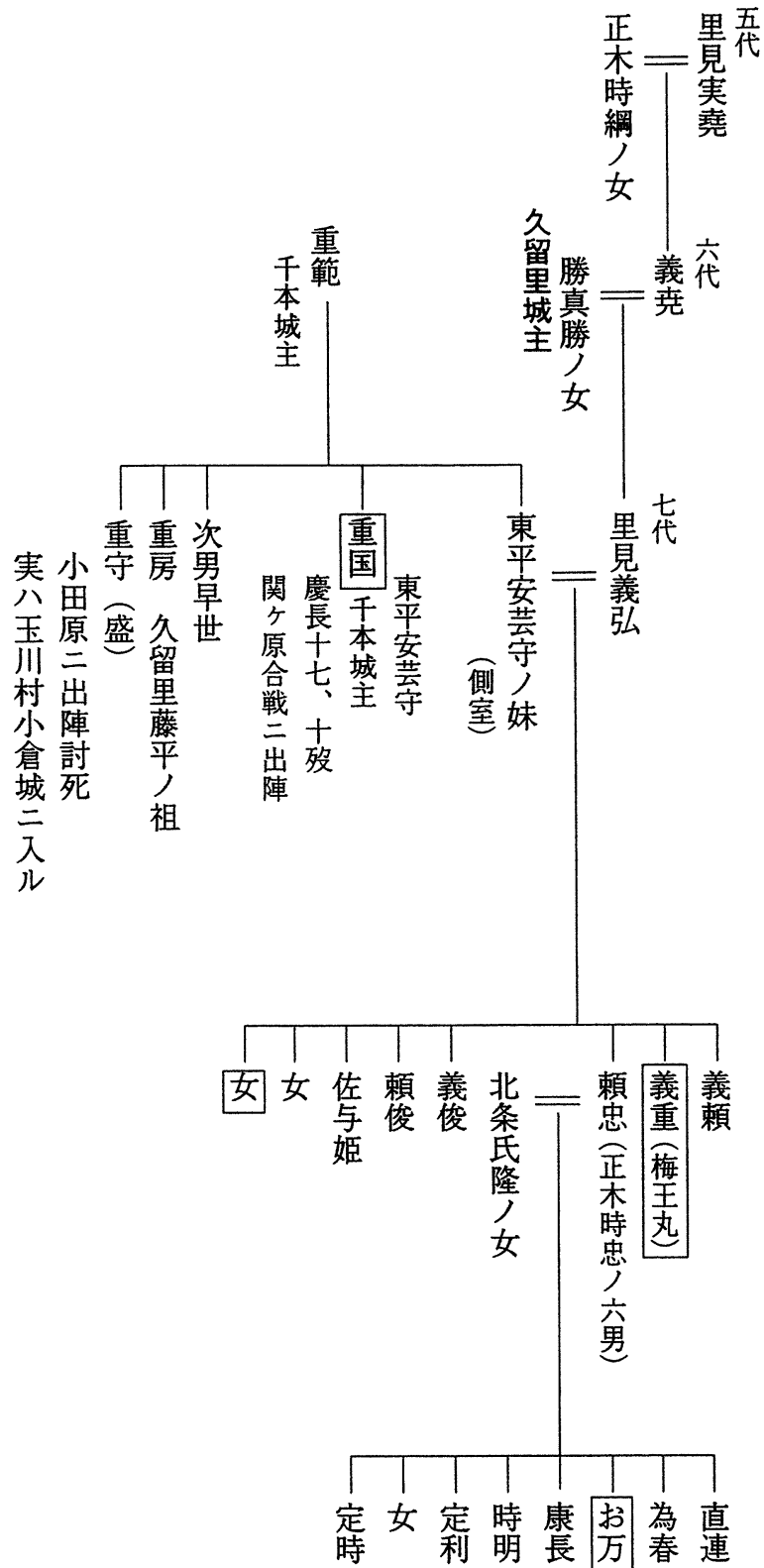
父の重国、重忠とその子息達は、梅王丸事件以来里見家に反感を懐く。梅王丸事件に代表される一連の里見義頼のやり方に反発したのが、大多喜城主正木憲時である。天正八年（一五八〇）七月、叛旗を翻した。正木家は国府台合戦で金山城主・正木弘季を失い、里見義弘を救った正木時茂、討死した子息の大太郎に里見から何の恩賞が無いばかりか、むしろ疎んじられた。長い間の盟友上杉謙信を裏切り、天敵北条氏との「房相同盟」（天正五年・一五七七）が起因と考えられる。

正木家と同じように里見家重臣であった万木城（夷隅町）の土岐頼定は、国府台合戦後、里見義弘と反目し、北条と結ぶようになる。土岐為頼も歿し、頼春が土岐家当主になると、里見家も義弘、義頼のあと義康が当主として天正十六年万木城を攻めた。このあと土岐頼春より千本城主の藤平重国・重忠に加勢の願いが再三あり、北条氏政からの下知もあり、重国・重忠は子息の重祐、重郷、重共ら一門を率いて、天正十七年三月七日万木城に到着。重房は留守居として千本城に残る。六月里見軍は出陣したが、土岐・藤平軍が発坂峠で迎え撃破した。

この天正十七年には、北条の部将猪俣保範直は真田昌幸の名胡桃城（群馬県）を奪い、これに激怒した豊臣秀吉は十

藤平家と養珠院の関係

平成7年10月 石川修道作成



一月二十四日、北条氏討伐の布告を出した。徳川家康は翌十八年二月七日、駿府より小田原に出陣した。土岐頼春並びに藤平一門、そして下総の雄、千葉氏一族も、北条氏政・氏直父子の要請により小田原城に馳せ参じた。長期間籠城策の北条軍も徹底抗戦から降伏へと流れが変わり、七月六日小田原城明け渡し、翌七日から九日にかけて城兵は退去していった。十一日には、北条氏政(五十三才)と氏照(五十一才)は切腹を命ぜられた。

小田原より帰郷した藤平重国、重忠、重祐等は、千本城に留まらず、大野村隨領に蟄居し、重共は祖父重国、父重

忠と大野村横宿に住した。この大野村横宿は池上本門寺八世常在院日調上人（一四二八―一五〇二）の生誕地であり、瑞竜庵五世となった日調上人は、文明十二年（二四八〇）庵を竹之沢より現在の台地に移し、院号を改め、栄久山光福寺とした。藤平一族の菩提寺である。また、この地には南北朝時代、足利方についた狩野氏が、伊北・伊南の主として大野城に住んでいた。日調上人の父は狩野叡昌の子息狩野伯耆守（朗舜）、母は足利氏の娘（祐幸）である。朗舜の妹・理哲尼の子が、「稚児貫主」といわれた池上・比企谷七世の日寿上人である。鍋冠り日親上人（一四〇七―一四八八）の京都本法寺は、後花園天皇より四条高倉の地を賜り、本阿弥清信と狩野家の多大な寄進により創建された。よって狩野叡昌の名に因んで「叡昌山」の山号となった。

万木城の土岐頼春は小田原城落城後、城を焼き払って常陸へ落ちたという。一方、豊臣秀吉方についた里見義康は、小田原の秀吉本陣へ遅参し、上総国は没収されてしまった。天正十八年八月一日、徳川家康は江戸城へ入城し、十五日には諸将を関東各地に配した。上総の佐貫城には内藤家長、久留里城には大須賀康高、大多喜城には本多忠勝、勝浦城には本多忠勝に仕官することが許され、重忠の子息三人、重祐、重郷、重武が家臣となる。のち重祐、重郷は帰農する。重武は慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦に、主君忠勝と参陣する。そして元和元年（一六一五）大阪城夏の陣が始まり、五月七日、大阪天王寺口において東軍の第一戦列の本多出雲守忠朝に従い、第一軍にいた。藤平治右衛門重武（源五郎）である。西軍の毛利勝永軍と対陣し、正午に銃撃戦が始まり、双方の槍隊が突入、激戦が展開された。この激戦に、本多忠朝軍の名ある部将が倒れた。

小野勘解由、加藤忠左衛門、藤平治右衛門、臼杵七兵衛、中根権兵衛、石川半弥、山崎半右衛門、大原長五郎、稲毛市郎兵衛などである。

この模様は「寛政重修諸家譜」「譜牒余録」「大坂御陣覚書」等に記述されている。⑤

藤平治右衛門重武

元和元年五月七日（一六一五）大阪城夏の陣にて討死。法名・蓮乗院日生。天王寺の一心寺に重武の墓ありと伝わる。九代重祐の末弟なり。

九代重祐

喜右衛門と号し、本多忠勝に仕え、のち大野村川崎を開発する。寛永八年三月二十二日歿（一六三一）。法名・蓮心院日祐。

川崎系より屋号「祖父母^{ぢぢば}」が出る。藤平真平氏（嘉永六年生）は中川村々長を経て千葉県県議会議員となり、大正十年頃「上総水電株式会社」を創立。昭和十七年関東配電（のち東京電力）に合併された。藤平孝子氏活躍中なり。現当主、藤平俊之氏。

九代の弟重胤

右近と号す。小田原城落城の時、重盛と共に討死と伝わるが、埼玉玉川村小倉城に入る。子孫の屋号「おやしき」。江戸時代は代官所与力と伝わる。現当主、藤平高三氏。

九代の弟重郷

藤之丞と号す。正保二年十月一日歿（一六四五）。法名・覚蔵院日印。

本多忠勝に仕え、のち大野村金谷を開発する。子孫は勝浦藤平の祖となる、元禄時代、南山田の寺（真言宗）を改宗させ、池上本門寺より住職を迎え、大法寺とする。中村檀林日本寺に多大の供養米を提し、外護する。子孫の藤平

東作氏は明治十一年、夷隅郡の法花村、貝掛村、南山田村、荒川村、中島村の五村連合の戸長となり、県議会議員となる。現当主、藤平静雄・達夫氏。（埼玉都幾川村）

九代の弟重共

平右衛門と号す。元和三年二月十三日歿（一六一七）。法名・了善院日祐。

天正十八年（一五九〇）七月万木城落城の後、祖父重国、父重忠を介抱して大野村川崎に入り、文禄四年（一五九四）三月横宿に住す。重共の系統に三系あり。

①南中興の平右衛門系。

②向島むかいしまの祖は新次郎系。現当主、藤平栄治・やす子氏。

③古込の祖は勘五郎系。もと身延山庶務部長・藤平賢栄上人は鴨川妙昌寺住職。現当主、藤平存秀師・悦子氏。

※久留里藤平家は永禄三年（二五六〇）に定住したと伝わる。子孫の藤平量三郎氏は明治七年生まれ。久留里水力電気株式会社創立。大正四年より久留里町々長。大正十三年君津政友会に推されて千葉県議会議員となり、一期目の同十五年二月県議会議長に就任。上総町（久留里、松丘、亀山）の名誉町民。現当主、藤平実・量郎氏。

（藤平家先祖の歿年は、系図により多少の差異がある）

以上のことから、藤平家に関して次の事が理解されよう。

夷隅町大野・藤平家



藤平家代々の墓



夷隅町大野・光福寺



(左端) 光福寺 大井文彦住職



- 一、宗祖の血脈を継ぎ、宗祖より文永八年十月筆の本尊と御形見の小袖を相伝している家系である。
- 一、宗祖のご舎弟、重友藤平の時代より武士であり、北条家、里見家、本多家に仕えた。
- 一、宗祖のいう「旃陀羅が子なり」とは、むしろ東条^{みくりや}厨の漁業（鵜飼^{うかい}、江人^{えびと}、網代^{あじろ}）を統率する官職の内膳司^{ないぜんし}に係した民部大輔や蔵人や滝口に係していたのが貫名家であろう。
- 一、その昔より、吉浜妙本寺、中村檀林、勝浦大宝寺、光福寺、池上本門寺などの日蓮教団の外護者であった。
- 一、狩野家、正木家と因縁深き関係があった。
- 一、明治以降、鉄道建設や水力発電、県議会議員など社会貢献が高い。

(二) 日向上人廟

日向上人は、日蓮聖人の縁者と伝えられる。父男^{おがね}金藤三郎は貫名重忠の弟と伝えられ、鴨川の男金^{おがね}に住し「男金」と称した。茂原の小林民部は祖父。藻原寺開基・斉藤遠江守兼綱、隅田五郎時光は藤原系の一族と言われている。小湊バスで茂原駅―上永吉―長南営業所の「法華谷^{やっ}」下車、徒歩五分に日向上人廟がある。日向上人は宗祖七回忌に身延二世となり、藻原・身延を兼任した。身延を大進阿闍梨日進に譲り、長南町坂本「法華谷」に隠世。妙光寺（明治二年藻原寺と改称）は隅田五郎の長男・中老僧丹羽阿闍梨日秀が継ぎ、日向上人は正和三年九月三日（一三二四）六十二歳で寂す。坂本は日向上人の母君の出身地と伝わるが、不詳である。バス停の道は拡張され以前より明るくなり、周囲は蓮沼である。その奥の山林に、横穴式廟が岩扉で封閉されている。この日向上人終焉の地を法華谷法華寺としたが、昭和四十五年藻原寺と合併、「向尊殿」の堂が建っている。

(三) 笠森観音

笠森観音は、建長五年四月二十八日清澄山にて立教開宗した日蓮聖人が、地頭東條景信に擯出され、浄顕房・義浄



茂原市阪本・日向上人廟所



同上

房に導びかれ下山し、笠森観音堂まで避難された寺院である。茂原の住人・隅田五郎時光が宗祖の来寺を知り、説法を聞き信者となり、斉藤兼綱・小林民部宅へ案内したと、笠森寺縁起（元龜二年・一五七二）に記されている。日蓮聖人と隅田時光公との対面絵馬は、縦一二〇cm横一五〇cm。県下で二番目に古い絵馬である。延暦三年（七八四）伝教大師最澄が楠の霊木で十一面観音像を刻み、山上に安置し開基された。観音堂は長元元年（一〇二八）、後一條天皇の勅願により、日本唯一の「四方懸造」堂である。上総の国司が赴任し長南郡を視察した時、笠森で田植の娘が目にとまった。娘の顔は後一條天皇が先年亡くした皇后の顔に生き映しであった。国司は後一條帝に報告し、その娘（於茂利）を宮中に奉職させた。帝は大変喜び、於利もそれに応えた。後一條帝は娘に、生国上総について尋ねた。娘は故郷に観音像が祀られ、村民の信仰をあつめ、その観音像は露座に安置され、雨が降ると村民が濡れないように笠をかぶせるのですと答えた。帝は村民の信仰を誉め、後一條帝の勅願として巨岩の頂上に「四方懸造」の観音堂を建立し、笠森観音堂と命名された。その娘の家の生業は、「箕作り」であった。「箕作り」は、古代より山の民・山窩さんかの代表的職である。笠森に平安・鎌倉期に、定住する山窩の人々が住んでいたのである。その山窩の人々が歩く情報網としての「山窩道」が、小湊の旃陀羅別所―天津―清澄山―麻綿原―横頼―黄和田―養老―笠森―茂原―長柄の別所と通じていたと考えられる。日蓮聖人は清澄寺時代より、山窩の人々と親交し、彼らに護られていたのである。だからこそ、建長五年の立教開宗時、地頭・東條景信の迫害にも危機を脱し、笠森観音堂まで避難することが可能であったのである。

（四）蔵玉の虚空蔵尊

清澄寺が真言宗時代、地元の人々が「清澄の三虚空蔵参り」として巡礼していた一つである。君津市蔵玉にある星福山円盛院（智山派）である。千葉県指定の有形文化財「木造虚空蔵菩薩像」は像高八六・八cmのかや材の寄木造り



君津市蔵玉・星福山円盛院

で、後土御門天皇の応仁三年（一四六九）像能満の作と伝えられる。円盛院は仁明天皇の承和三年（八三六）に天台僧円仁の開創と伝わる。清澄山を源流とする小櫃川上流の蔵玉にある。産鉄地名の「釜生」^{かまおい}が隣地で、附近には産鉄地名が残っている。虚空蔵信仰は平安時代よりこの地に有ったと考えられる。虚空蔵信仰を有した日蓮聖人も清澄修行時代、山岳信仰として三虚空蔵巡礼（廻峯行）している筈である。この蔵玉を通過して道善坊有縁地（現在の久留里・加名盛）に参拝している。そこが「報恩抄送状」・「華果成就御書」に言う「道善坊墓」（経塚）の「嵩盛」^{たかもり}である。

(五) 「道善坊墓」（経塚）について

君津市加名盛に古来、道善坊墓と伝えられる経塚がある。昭和二年、立正大学教授稲田海素師は、仙台の本山孝勝寺後住問題で小湊誕生寺の会議に出席し、翌日当時真言宗の清澄寺を参拝、役僧と面談し、道善墓の存在を知り、加名盛の道善墓を訪れるのである。墓（経塚）を管理する本吉初太郎氏に世話になり、帰郷する。本吉家所蔵の「道

善坊塚縁起」によると、「清澄の蓮長法師（廿六歳・日蓮）は高水村の藤井図書という人物に会い、宗祖は心願によりて妙経一部を書写して埋経したいと図書の高水村まで来たが、隣の上関村・本吉藤太夫正久所有の山林がより適地なりと宗祖は感得し、妙経一部書写の経石を埋め大願成就（天下泰平、玉体安全等）したと言う。法治元年（一二四七）十月十三日のことなり。それ以来、山頂より光明を放ったと伝わる。宗祖の師・道善坊が建治二年（一二七六）三月十六日入寂すると、同七月二十一日に報恩抄を撰述し、二十六日に報恩抄送状を記し、日向・日実上人が清澄に到着したのは八月二日であった。浄願坊・義浄坊も列座して墓前にて報恩抄を誦し回向す。清澄寺はまだ東條景信一族の影響を受け、宗祖の納経塚を建立できる状況ではなかった。そこで宗祖は報恩抄送状に、報恩抄二遍三遍は「嵩森」にて誦すべしと命じている。翌三年三月三日に上関村本吉藤太夫正久の「嵩森」に宗祖の名代として中老僧日実上人が道善塚（経塚）を築き、同二十八日に正久山弘妙院妙長寺を建立した。本吉正久は道善坊・宗祖と同じく虚空蔵菩薩を信仰しており、のち身延の日蓮聖人を訪ね相談したところ、法華円頓の文、四仏見の文を以って開眼して頂いた（取意）と伝承されている。

この「道善坊塚縁起」は池上本門寺六世延命院日行上人（一四三四寂）によって書かれている。日行上人は上総巡錫し、市原に妙長寺、夷隅に円隆寺を開基している。その折、道善墓に詣でている。本吉正久が虚空蔵信仰を抱いていたとすれば、彼は当然の事ながら清澄寺本尊の虚空蔵菩薩も参拝している筈である。そこで道善坊とも旧知であったと考えられる。日蓮聖人の要請に応じて道善墓（経塚）を許認するのもそのためであろう。道善坊は日蓮聖人の師であつても清澄寺の山主ではない。報恩抄に「故道善房は……きわめて臆病なりし上、清澄をはなれじと執せし人なり。地頭（東條）景信がおそろしきといひ、提婆・瞿伽梨にことならぬ、円智・実成が上と下とに居ておどせしを、あながちにおそれ」とある通り、清澄寺在職の円智坊・実成坊から日蓮聖人の開宗初説法を責められ、日蓮支援を貫くことが出来なかつたとある。道善坊が清澄寺山主なら一山の反対派を抑制できたのである。それが出来なかつた

と言う事は、道善坊は清澄寺山内の諸仏坊の坊主、又は道善坊の坊主であったのであろう。そうすると、道善坊の墓は諸仏坊の近くに有るべきだろう。現在はその諸仏坊の存在位置が不明である。日蓮聖人、阿仏房、富木常忍の母の如くであれば、道善坊も死後焼骨と考えられる。さすれば建治三年三月、日蓮聖人が師匠報恩のために上関村に道善墓（経塚）を築く際に、師の舍利骨を移す（分骨を含めて）ことは可能であり、弟子の浄顕坊、義浄坊もそれを認めたであろう。君津市加名盛（上関村）に道善坊遺骨が埋蔵されている可能性は充分にある。だからこそ昭和二年時点で真言宗清澄寺役僧が稲田海素立正大教授に道善墓の存在（松丘の上関村・経塚）を告げるのである。日蓮聖人は師・道善坊の死去報告を受けたとき、

「彼人（道善坊）の御逝去ときくには、火にも入り、水にも沈み、はしり（走）たちてもゆひて、御はか（墓）をもたゝいて経をも一卷読誦せんともへど」（報恩抄）
と、その時の心境を述べている。報恩抄送文に、

「御まへ（浄顕坊）と義浄坊と二人、此御房（日向・日実）をよみてとして、嵩もり（森）の頂にて二三遍、又故道善御房の御はか（墓）にて一遍よませさせ給^ヒては、此御房にあづけさせて給^ヒてつねに御聴聞候へ。」

弘安元年四月の華果成就御書に、

「さては建治の比^{こころ}、故道善房聖人のために（報恩抄上下）二札かきつかはし奉り候を、山高き森にてよませ給^ヒて候よし悦^ヒ入^{ツテ}候。」

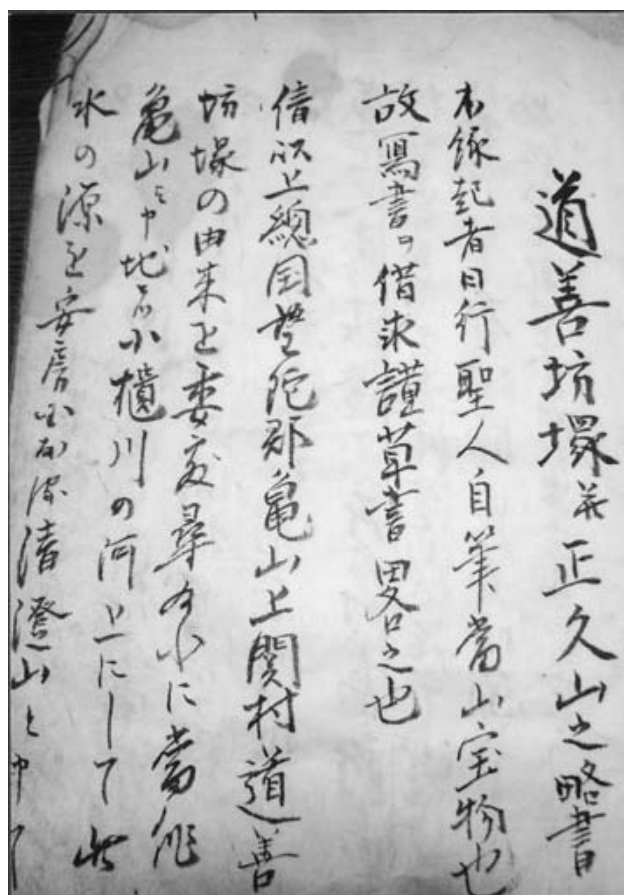
ここに言う「嵩森」とは清澄寺より六里程はなれた加名盛（上関村）の森を指し、日蓮聖人が妙経を小石に書写（二字一石）した経塚の道善墓を示している。上関村の住人は、明治・大正期には清澄山系の樵^{きこり}の作業もしていた。

君津市加名盛・道善坊経塚（墓所） 遠景



道善坊経塚（墓所）





道善坊塚縁起書



道善坊経塚出土・経石

(六) 妙長寺

本吉家古文書には、次の如く久留里・妙長寺を紹介している。

「日蓮聖人経塚ニ来リテ道善ノ石碑ヲ設ケ、傍ニ一寺ヲ建立シ正久山弘妙院妙長寺ト号シタリ。弘安五年十月十三日聖人池上ニ於テ入滅シ給ヒテ後三年、直弟日實上人来リテ祖師ノ御絵像及ビ南無妙法蓮華経ノ掛物（祖師日蓮聖人ノ本尊）ヲ正久ニ授ケ、当家ノ靈宝タリ。日實上人来リシ後、七十四年ヲ経テ、即チ永享六年（一四三四）池上六世日行上人当地ニ来リ給ヒテ寺ノ大破ヲ見テ、久留里陣田村ニ一字ノ精舎ヲ建立シテ正久山弘妙院妙長寺ト言フ。上関うわぜき村ヨリ引キ寺トス。」

この文書に言う「祖師の本尊・絵像」が本吉家に授与されたのは弘安八年（一二八五）の事である。それより七十四年を経ると延文四年（一三五九）であり、永享六年ではない。日実上人のあと道善墓を訪れたのは、おそらく池上三世大経院日輪上人であろう。日輪上人は平賀忠晴の次子、経一磨（日像）の弟・亀王磨である。兄の経一磨が文永十二年二月七歳で身延の宗祖に給仕したのに続き、亀王磨も建治二年春、五歳で身延の宗祖に仕えるのである。同じく下総の一歳年長の曾谷教信の次子も久本房日元を親代りとして宗祖に給仕し、身延三世大進阿闍梨日進となる。このように身延期の日蓮聖人の門弟教育に鎌倉武士の名門子弟が入門し、沙弥になる前の幼児宗教教育が成されていた。宗祖の孫弟子に当る池上三世日輪上人等には、記録に残らない宗祖の宗教活動や伝承が旨く伝わっていたと考えられる。その一つが上関村の道善墓（経塚）である。日輪上人は建武二年（一三三五）木更津の田中堂・智学坊を起伏させて光明寺を創建する。このとき宗祖からの道善坊伝承に基き訪れたのが、上関村の道善墓であろう。その日輪上人が入寂したのが延文四年四月四日、八十八歳寂である。本吉家文書にいう「日実上人の道善墓参拝後七十四年」とは、池上三世日輪上人入寂の延文四年（一三五九）と全く一致するのである。この延文四年から更に七十四年経過

すると、本古家文書にいう池上六世延命院日行上人が道善墓を訪れた「永享六年（一四三四）」に相当するのである。日輪上人は文永二年（一二六五）に宇都宮妙正寺、延文元年（一三五六）に大磯妙輪寺を開基している。



君津市久留里・妙長寺



妙長寺・虚空藏菩薩像